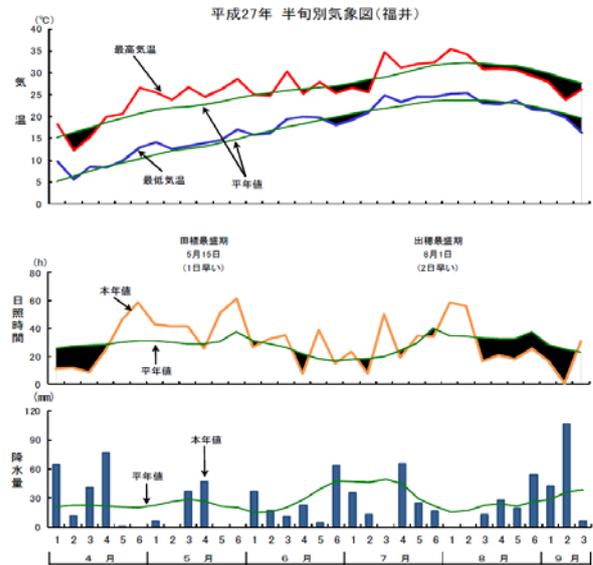


平成27年産米の作柄概況について

■ コシヒカリでは網下が多い一方、高温登熟回避で品質は良好 ■

平成 27 年産米の作柄は、田植え期から出穂期までは天候に恵まれたことから、もみ数は「やや多い」となったものの、8月中旬以降は気温、日照時間も平年を下回って経過したため、登熟が「やや不良」となり、コシヒカリ等で極めて網下(屑米)が多くなっているものの、品質や食味は近年になく良好な状況です。

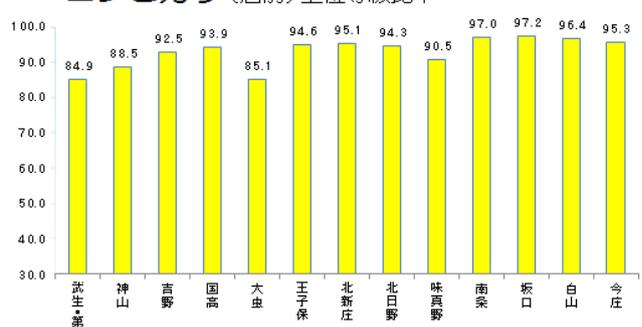
坪刈り調査の結果では、ハナエチゼンはカメムシの多発(斑点粒の色選処理)による品質と収量の低下、コシヒカリ・あきさかりでは登熟不良(網下米の多発)による減収、日本晴はどちらも少なく平年並みの収量となっています。



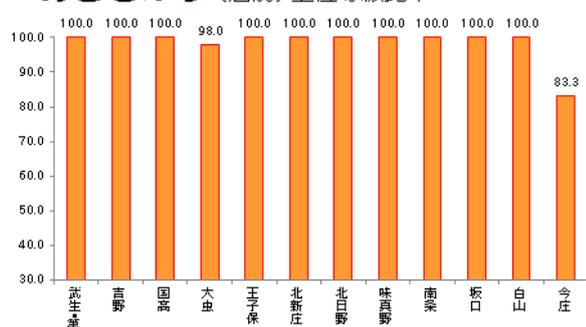
ハナエチゼン (倉前) 上位等級比率



コシヒカリ (倉前) 上位等級比率



あきさかり (倉前) 上位等級比率



日本晴 (倉前) 上位等級比率



平成27年産米 肥料試験・生育調査圃場 脱穀調査平均データ

品種名	調査点数 (点)	全重 (kg/10a)	籾重 (kg/10a)	わら重 (kg/10a)	粗玄米重 (kg/10a)	精玄米重 (kg/10a)	網下重 (kg/10a)	網下率 (%)	整粒歩合 (%)	食味スコア
ハナエチゼン	2	1,162	652	472	487	459	28	6.1	66.7	72
コシヒカリ	39	1,268	662	573	487	424	63	14.9	70.1	81
あきさかり	11	1,321	696	564	517	450	67	14.9	73.9	78
日本晴	13	1,603	716	819	550	510	40	7.8	75.3	74

秋の田起こし3つのポイント

～ 土づくりと秋の田起こしで気象変動に負けない稲づくりを ～

ポイント ①

今より3cm深耕(目標15cm)

効果：根が張る領域を増やし、水分・栄養分を吸収しやすくする。さらに、ワラもすき込み易くなる。



ポイント ②

稲わらの早期すき込み腐熟促進

効果：栄養分、団粒構造で(ワラは全量、堆肥は1t)土を肥やす。来春、移植時期に稲わらをすき込むと代掻きや田植作業がやりにくくだけでなく、硫化水素や有機酸の発生により、根がダメージを受ける。

ポイント ③

土壤改良資材(ホワイトカリウなど)の施用

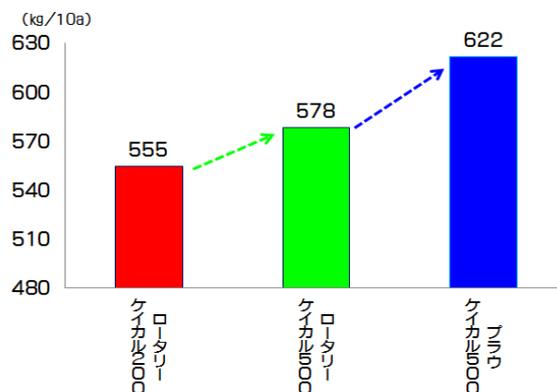
効果：ケイ酸質資材の施用により地力UPを図り、異常気象の条件下でも登熟歩合や整粒歩合を高める。

平成27年産米 土づくり資材肥料試験圃場 脱穀調査データ

試験区:南越前町宇津尾

品種名	資材名	全重 (kg/10a)	籾重 (kg/10a)	わら重 (kg/10a)	粗玄米重 (kg/10a)	精玄米重 (kg/10a)	網下重 (kg/10a)	網下率 (%)	整粒歩合 (%)	食味スコア
コシヒカリ	無散布	1,135	599	501	434	357	77	21.6	73.3	85
	ホワイトカリウ	1,098	593	475	439	408	31	7.6	74.2	85

砂壤土や礫質など、地力が乏しい圃場では土壤改良資材の選択の前に、深耕による根の生育範囲の確保や地力窒素の有効活用が極めて重要です。根の伸長の促進と生育期間中の栄養凋落状態を回避したうえで、ケイ酸資材などを併せて施用することが、収量や品質の向上につながると考えられます。(平成26年産試験データ右図参照)



👉 平坦地での特別(有機質肥料)栽培の場合、けいふん等の投入により、腐植を高めつつ初期生育を確保するようにしましょう。

平成28年産 日本晴の収量向上は「土づくりと深耕から！」

深耕・土づくりのどちらかだけでなく、両方あわせて実施を！